戦後50年の光と闇

真宗ブックレット No.5

「戦後五十年の光と闇」によせて　能邨英士……2
水平に出会うために　玉光順正……7
戦後五十年を考える　尾畑文正……14
—インタビュー—金時鐘さんに聞く
光と影のはざまに生きて　……30
—座談会in沖縄—金城実　小橋川清弘　知花昌一　玉光順正
沖縄から日本を問う　……44
—インタビュー—内海愛子さんに聞く
見えなかった、語られなかった事実から　……72

〈随想〉
—50年後の8・15に思う—
「君は知っているか」　大河内了義……84
一寸先は光と言えるか　長坂公一……87
未来から、今　兪　渶子……96
靖国信仰の恐ろしさ　中村　信……99
「現在責任」を見つめる歩みへ　大東　仁……103
心に刻む歩み　四衢　亮……105

表紙絵・イラスト/鄭光均

「戦後五十年の光と闇」によせて

宗務総長　能邨英士

本年は、特に戦後五十年という歴史の節目の年ということで、わが国にかぎらず国際的にもさまざまなかたちで問い直しがなされています。

ふりかえってみますと、終戦ののちに、つねに「戦後何十年」という言い方でもって、私どもが生きてきた時代が考えられました。そのことは、今日もなお「終戦」という課題が残されているといいますか、むしろ私どもに担わされている課題の深さを思わないわけにはまいりません。

かえりみれば、戦時中に私どもの宗門は、明治以来繰り返されてきた戦争を「聖戦」と称し、アジアの国々への侵略と植民地化を、国の繁栄と発展のための正しい政策であるとして、積極的に日本の帝国主義の一翼を荷ない、多くの同行に他国への侵略と、その地を戦場とした殺戮（さつりく）を、信心の名のもとにすすめるという、人間の尊厳そのものを冒瀆する行為を重ねてまいりました。

そして、そうした反省に立ってようやく、戦後四十二年たった一九八七（昭和六二）年に、宗門としてはじめて戦争責任を表明いたしました。そのときのことばが、あらためて思い起こされます。「今日、私たちに直接かかわる、事件としての戦争は終わっているかのようにみえます。しかし、戦争を生み出した、政治・経済の仕組み、人々の価値観・人間の考え方は、基本的には今に至るまで変わっていないように思われます」と述べられています。まことに心すべき表明でありました。

宗門におきましては、本年三月に沖縄の地で、沖縄戦五十周年追弔法会をつとめ、そして、四月の全戦没者追弔法会におきましても戦後五十年、何を求め何を見失ったのかを確かめ、非戦の誓いを新たにいたしました。

ひきつづいて、長崎、広島の地において、被爆五十周年の非核非戦法要がつとまります。私どもの国が繰り返してきた戦争のはてに、長崎、広島での原爆投下という、かつて人類が経験したことのない戦禍を引き起こすことになりましたが、私たち人類がこの原爆を生み出したことの意味を問い、原爆の非人道性をしっかりと心に刻みつけておきたいと思います。そして今日なお被爆による苦しみとともに、もっとも国の援護を必要とした被爆された方々に心が寄せられなかったばかりか、被爆者というこ

とで、さまざまな差別を被ってこられたということを忘れてはなりません。

さらには、当時、朝鮮半島より連行され、労働を強いられていた人びとをはじめ、在外被爆者が、私たちの社会のなかで今なお置き去りにされているという、そのことであります　戦争責任を表明するとは、こうした戦中、戦前の歴史をそこに生きた人々の事実としてとらえかえし、戦後という時代の意味を明らかにすることに他ならないはずです。

また、この戦争で犠牲となられた人びと、殺された人びとのいのちの行方が、私たちの今日のいのちの在り方と、どう関わり続けているのかということを問い続けることもまた、私たち宗門の責任といえるでしょう。

こうした、いのちの行方ということを考えますとき、特に戦争で犠牲になっていかれた方々の、おひとりおひとりが抱いておられた苦しみや、悲しみを、「英霊」という戦争の神にまつることによってしずめていこうとすることは、そのことによって戦争の罪悪性を見えなくしていくことのみならず、再び国のために、いのちを捧げる人々を育ててしまうのだと思わざるを得ないのです。そして、このことこそが、国籍とか、民族をこえて、私たちの国がかかわってきた、すべての国の戦争犠牲者を差別なく思い起こしていくことを、長い間、私たちに見失わせてきたのであります。

宗祖親鸞聖人は、宗教といわれるものが、強いものにへつらい、弱いものをあざむいていく、いわば人を人でなくしていく、そういう宗教のありかたについて厳しく問うておられます。

現在も世界の中で、民族の独立と平和の名のもとに戦争がつづけられています。しかし、戦争や犠牲を必要とする平和は、本当の平和とは呼べないはずです。戦争に平和の名を冠することこそ、宗祖が厳しく問われた宗教に他ならないものでありましょう。

この宗祖の教えに背き、戦争を賛美した宗教となっていたことこそ、私たちの教団の歴史であり、このことを検証することが私たちにとっての戦争責任といえるのではないでしょうか。

宗祖は「愚禿悲歎述懐」の御和讃のなかで、

五濁増のしるしには
この世の道俗ことごとく
外儀は仏教のすがたにて
内心外道に帰敬せり

とお示しくださっておられます。ここに人間が自分の都合や思想、価値観を主張し合

い、限りなく五濁悪世を現出していく、その根源を明確に指摘しておられます。

この宗祖親鸞聖人の教えに導かれてみれば、限りなく罪悪深重（じんじゅう）・煩悩熾盛（ぼんのうしじょう）の凡夫（ぼんぶ）としての私が見い出されてくるのであります。それは、私たちお互いが生き合っていくなかで、背きあったり、いがみあっていかざるをえない、そういう私たちのありのままの姿を照らし出してくるお言葉であります。そうであればこそ、この世にあって自分ひとりだけさとりすまして救われるということはない、まわりの人びとと共にしか救われることがないということであります。

そういう衆生としてのひとりに立ち帰って、念仏者としての日々を実践していく、その生活がそのまま限りない平和運動として全世界に広まっていくことを、心から念願いたすものであります。

水平に出会うために

玉光順正
（光明寺住職）

戦争を忘れた戦後の「平和」教育

私は一九四三年生まれで、戦争に関する記憶というものは無きに等しいといっていい。戦後の物のなかった頃のことを少し覚えているぐらいである。

その私は、教育に関していえば「教え子を再び戦場に送るな」のスローガンのもとでの平和と民主主義の教育を受けたわけである。にもかかわらずというべきだろう、ここ十数年不思議な思いを消すことができない。それは、私たちは何故「あの戦争」つまり十五年戦争とも、太平洋戦争とも、大東亜戦争とも呼ばれたもの、その実態を全く教えられなかったのかということである。その間、日本人が、天皇の軍隊が、中国で、朝鮮で、アジア諸国でどんなことをしてきたのかということである。

もちろん、その当事者にとっては語りづらいこと、そして語りたくないことであったに違いない。だからこそ、家庭で語られたのも一面的なもので、ほとんど戦争とい

うものの苦しさ、被害の側面であって、決して加害者としてのそれではなかった。しかしそれが、学校教育の中で、歴史教育の中でも同様だったというのは何故だろうか。

私自身の記憶では、少なくとも学校教育の中で「あの戦争」については、日本はかつて戦争をしました。それも米英等と戦い、そして負けました。広島、長崎に原爆がおとされました。簡単にいってしまえばそれぐらいのことだったのでないかと思われる。そこではアジア諸国のこと等は全くでてこなかった。まして朝鮮人の強制連行等というようなことは一顧(いっこ)だにもされていなかった。このような記憶は私だけのことではないようである。

私自身が本当に貧しい知識でしかないが、「あの戦争」について学んだのは、ここ十数年、心ある人々との出会いと様々な導きとによってであるといっていいだろう。

戦後のこのような「平和」教育は、日本人の歴史観や戦争観の相違についても大きな原因となっているといえるだろう。戦後五十年の国会決議に関する混乱ぶりもその原因の一つはここにあるといっていいだろうし、また何よりも私たちが戦後五十年、国民的課題として戦争責任を語ったことがないという原因の一つもここにあるといっていいだろう。

日本国憲法の象徴天皇制採用の問題

何故、そんなことになったのだろう。今私が考えていることは簡単なことである。それは要するに日本の戦後処理の問題であるが、そのことについて、占領軍（GHQ）と日本の支配者との間での了解があったから（それは暗黙のうちにということかもしれないが）に違いないのである。それは日本国憲法の制定にまで影響している。いうまでもなく、象徴天皇制の採用である。つまり、天皇制を何らかの形で残すという了解が成り立ったが故に、私たちの「平和」教育もはなはだ不徹底なものとならざるをえなかったのだろう。おそらく担当された先生方にとっても大変だっただろうと想像される。もし近代を少しでも誠実に学べば、戦争責任ということと天皇とはどうしても切り離すことはできないからである。

このような、根源に国家を問うという視点のない、平和と民主主義の教育によって私たちは、自己と世界との関係を開く方法が全くつかめなくなってしまったといってもいいだろう。

このことは、私たちの側からいえばもう一つの側面がある。

唄を忘れたカナリヤ

鄭敬謨(チョンキョンモ)さんは「国家のあり方における是非を問わないという点において日本は誠に特異な国であり、このような思想はいやしくも現在の日本が建前としている民主主義とは相容れない」（『日本を問う』）という。

国のあり方を問うことのない真宗門徒とは、唄を忘れたカナリヤ以外の何ものでもない。私たちが浄土を持つということは、いいかえれば、国家を、具体的には日本という国家をきちっと批判する眼をもっているということであったはずである。それが親鸞の承元の法難に対する厳しい批判「主上臣下背法違義成忿結怨」であり、また蓮如の一向一揆を生み出した大きな原因「国の仏法の次第、非義たるあいだ、正義におもむくべき事」でもあったのである。

徳川幕藩体制以降、浄土を失い、それをいわば死後の世界としてしまった私たちは「あの戦争」をほとんどの真宗門徒も共に肯定し、ある部分では国家の先頭に立って戦ったということでもあるのである。

問題はそのことが今も続いているのではないかということである。自己と国家、それらをはじめ一切のものを相対化する原理である浄土を失った私たちは、戦後五十年を経た今もなお、自己を絶対化し、日本という国家を絶対化するという歴史観から自由でなく、差異を排除・抑圧・差別の手段とする、いわば天皇制の文化との訣別をつげられないでいるのである。

「機の深信は主として劣等感から救ってくださるのである」（「異るを歎く」）とは曽我量深氏の言葉である。

「あの戦争」に対する劣等感から日本人は自由ではない

戦後五十年の歳月は人々の精神の上にも大きな変化をもたらしてきた。やっと戦争が終わったという思い、そしてその後、戦争における様々な事実が知らされていくにつれ、それに伴っておこる様々な感情、特に日本という国家が国内外の予想を超える展開をしてきたが故におこる様々な問題、一方はアジア諸国の人々をはじめとする被害を与えた人々に対する取り返しのつかない思い、それがあるが故に他方では逆に、日本だけが悪いわけではないと居直り、日本という国家の行為を正当化しようとする思い、またそれらのことに対するアジア諸国をはじめ世界各国の人々の反応。戦後は終わったのか、終わっていないのか等という議論が時々おこなわれる。そして常に終わったとも終わらないともはっきりしないうちにその議論は終わってしまう。もちろんそのことに対するそれぞれの思いがあって、誰かが決めてそれでよしというわけではない。

私は今、これらのことを「あの戦争」に対する劣等感から日本人は自由でないからだと思っている。劣等感はいうまでもなく裏からいえば優越感でもある。そしてどちらも共に、自己と自分たちの国を弁護する論理でもある。

精神において、日本人は「あの戦争」がふっきれないでいるのではないだろうか。ふっきれるということは決して忘れてしまうということではない。精神とは「歴史的

決定的に欠けている歴史的意識と社会的責任